



出版クラブ会報
第119号

このたびのユネスコ国際図書賞受賞に際しましては、日本の出版界の方がたをはじめ、多くの海外出版人からお祝いや励ましのことをいただき感謝しております。

しかし、この賞は私個人であつても、出版界をはじめとするみなさまのご協力があったればこそのものであつて、みなさまに感謝すると同時に、日本の出版界全体にあたえられたものとして責任を痛感しております。

受賞理由のアジア地域出版開発事業の発端は、一九六五年アメリカ大使館を通じて話があった日から始まります。東南アジア地域出版開発のために、アジアのどこかにグラフィック・アート・センターを作ったかどうかというユネスコの勧告に基づいて是非協力をしてほしいということでした。その依頼を持ち帰って業界の方々と相談したところ、青木春雄さんや小峰広恵さんがぜひやりましょうと、強力にプッシュしてくれました。そこで私も元気づけられて本格的にとり組むことになったのです。

その直後、ワシントンで開かれたIPA(国際出版連合)大会でユネスコ図書開発局長のベアストック氏が、この問題でぜひ会いた

国際図書賞を受賞して



野間省一

盛り上がりを見せました。

ベアストック氏に会う前に、われわれも勉強していかなければならないということであるという研究いたしました。ところが勧告にある「グラフィック・アート・センター」なるものの意味がさっぱり

わからない。日本ではあまり使われない言葉なので、日本のユネスコ当局に問い合わせてみたが、何か印刷のことではないかというく

主な記事

- ▽国際図書賞を受賞して
- ▽「統一本体」としての存在
- ▽新春紙上名刺交換
- ▽出版の世界の片隅から
- ▽目黒三策氏を悼む
- ▽出版クラブ新維持員に二十四社
- ▽出版歳時記▽大橋佐平翁伝

いというので、日本の出版界から総勢二十三名という多勢が大会に参加したのである。それまでIPA大会には、私と下中邦彦さんのふたりが参加する程度だったのですが、あのワシントン大会から国内の出版界も国際的な活動に大きな本当のところ戸惑いました。

苦勞したことといえば、国内の業界内部を固める以上に、日本の政府当局、ユネスコ関係当局を動かすのに骨が折れました。しかし当時の井上事務総長や昇さんたちは本当によくやってくれました。具体的組織づくりの問題で、ユネスコの機関にすると官庁内に部署を作るのが難かしいということ、民間の方に財団法人を作ることで、民間の方に財団法人を作ることにしました。次は資金の問題で、どこから金を集めるかという段になり、私が出すことにしました。

当時、出版の研究機関はエディタースクールしかなかったもので、研修コースの具体的なスケジュールは、その講師の清水英夫氏(現青山学院大学教授)に頼んで骨格を作ってもらいました。

一九六六年に開かれた第一回のアジア地域出版専門家会議では、私が議長をつとめたのですが、会期中は毎朝九時に会場の東京ブリ

ンスホテルへ行って、ベアストック氏とインンドのマルホトラさんら三人の副議長と打合わせをしたのですが、英語が十分に話せないのが弱りました。井上さんや、通訳の桜田さんが協力してくれてほんとうに助かりました。

一緒に苦勞した人で忘れられない人は、何といっても事務局の中心になった村井智子さんの活躍です。村井さんがもしいなかったらこの研修事業はここまで来なかったでしょう。研修事業の重要さを誰よりも理解していた上に、英語が上手で、研修生からは「ママさん」と呼ばれて慕われていました。私も村井さんから英語を教わったようなものです。本当に惜しい人を失いました。

アジア地域の研修コースが軌道にのった後、私は二度ばかり東南アジア各国との交流を深めるために十か国を訪問しました。母国の出版事業の中心になって活躍している卒業生たちが非常に歓迎してくれましたが、あの人たちに一度集まってもらって研修生の同窓会をやるといいと思いますね。

昨年、研修生のひとりであるマレーシアのメノン氏が中心になって東南アジア出版連合が作られました。そうしてその出版連合主催

の研修コースが今秋マニラで開催されましたが、われわれの研修事業が、東南アジア各国が自力で研修を行なうほどに成長をとげたことは、まことに喜ばしい限りだと思います。今後の方向としては、各国の高校あるいは大学に専門コースが設置されて、若い有能な人たちが輩出されるようになるということです。

先日、開発事業の成果のひとつである共通読物の第二集を贈られました。共通読物で何をとり上げたかは当初からの問題でした。まず民話を取りあげ、つぎには各国共通の科学もの、テレビとか自動車の話をとり上げた方がいいということでした。今後はこども向けの百科事典的なものもいと思います。

いよいよ一九七六年にIPAの東京大会が開かれます。二十一世紀はアフリカとアラブの世紀だといわれております。そのことを念頭において、ソロバンづくでなく、世界との交流をもっと深めることが必要です。その意味では出版界がしっかりしなければいけません。IPAの東京大会を立派にやりとげるかどうか、世界が注目しております。

私が今回賞をいただいたいちばんうれしいことは、利益にならないことをやった成果が認められたということです。この面からみれば私の受賞は当然であったといえなくもありません。(講談社社長・書籍協会会長・クラブ副会長)